

## 活動報告

# 日本大学文理学部学生FDワーキンググループ 活動の軌跡と今後

古田智久\*<sup>1)</sup>, 今宮加奈未<sup>2), 3)</sup>, 安田結城<sup>2), 4)</sup>

<sup>1)</sup>日本大学文理学部, <sup>2)</sup>日本大学文理学部学生FDワーキンググループ,  
<sup>3)</sup>日本大学文理学部哲学科平成26年3月卒業, <sup>4)</sup>日本大学文理学部哲学科4年

「日本大学文理学部学生FDワーキンググループ」(以下、「学生FDWG」もしくは「WG」と略記)は、学生が参画するFD活動を目的として日本大学で初めて組織された団体であり、その構成員はすべて文理学部在籍の学生である(規約上は、文学研究科・総合基礎科学研究科・理工学研究科地理学専攻の大学院生も可とされている)。本稿では、文理学部において学生FDWGが組織されるに至った経緯とこれまでの活動の軌跡を報告し、WGの今後の活動の方向性について記している。

第1節では、WGを支援・監督する立場にある教員の視点から、学生FDWGが学部内組織として正式に承認されるまでの経緯と平成25年度までの活動の軌跡、並びに文理学部における学生FDWGの今後の活動への期待・希望について記している。初めに1-1において、FDに学生が関わるようになった事情について分析し、そうした全国的動向の中で文理学部においても学生が参画するFD活動が始まった経緯と平成25年度までの活動の軌跡を報告している。続いて1-2において、文理学部学生FDWGの今後の活動に対する教員側からの期待・希望を記している。

第2節では、学生FDWGの創設に関わった学生の視点から、WGの活動の軌跡と今後の展望について記している。2-1では、WGが結成されるに至った経緯及び平成25年度までの活動を簡潔に振り返り、続く2-2において、平成26年度のWGの活動について、平成25年度の活動との違いを明確にしながら報告している。最後の2-3において、こうした活動実績に基づいて展望されるWGの今後の活動の方向性について、学生の視点から提言を行っている。

キーワード：文理学部学生FDワーキンググループ, 学生FD活動, 学生発案型授業, しゃべり場

## はじめに

本稿は、平成23年10月から平成26年9月にかけての日本大学文理学部学生FDワーキンググループ(以下、「学生FDWG」もしくは「WG」と略記)の活動の軌跡、並びに今後の展望について記すものである。第1節では、WGの活動の軌跡と展望について、WGを支援・監督する立場にある教員の視点から記し、第2節では、当事者である学生の視点から記す。

## 1 文理学部において学生FDWGが結成されるまでの経緯と 学生FDWGの活動の軌跡、そして今後の活動への期待

古田 智久

第1節では、教員の視点から、文理学部において学生FDWGが学部内組織として正式に承認されるまでの経緯と平成25年度までの活動の軌跡、及び文理学部における学生FDWGの今後の活動への期待・希望について記す。初めに1-1において、FDに学生が関わるようになった事情について分析し、そのような全国的動向の中で文理学部においても学生が関与するFD活動が始まった経緯を報告する。続いて1-2において、文理学部学生FDWGの今後の活動に対する教員側からの期待・希望を記す。

### 1-1 学生FDWGが結成されるまでの経緯と活動の軌跡

(総務省統計局の調査によれば)平成4年に18歳人口がおよそ205万人でピークを迎え、それ以降漸減していき、平成25年にはおよそ123万人となっている。こうした減少傾向はさらに続き、10年後の平成36年には18歳人口が106万人程度になると予想されている。それに対して、(文部科学省の調査によれば)4年制の国公私立大学の数は、昭和48年度から平成元年度まで約15年間400校台で推移していたが、平成2年度に500校を突破すると、平成10年度に600校、平成15年度に700校を越え、現在(平成26年度)は781校となっている。大学入学定員並びに志願者数・志願倍率は、平成4年度には(順に)およそ47.3万人、92万人、1.94倍であったが、平成25年度には58.4万人、67.9万人、1.16倍となっている。大学進学率と大学収容力(大学入学志願者に対する入学者の割合)は、平成4年度でそれぞれ39%、60%であったが、平成25年度には49.9%、92%となっている。

以上のことから現状を分析・推測すると、少子化の傾向の中でさらに大学の数が増加したため、(大学進学率が上昇しているとは言え)大学収容力が上昇し、いわゆる「全入時代」が間近に迫っていることが予想される。そのため、大多数の大学において入学者の確保が喫緊の課題となり、(12月以前に入学者を確保することができる)推薦入試やAO入試の定員が年々増やされており、平成24年度には私立大学入学者の半数超(50.5%)が一般入試を経ずして入学するに至っている。また、入試によって十分な学力を有する学生を選抜することができない学部・学科、ないしは定員割れとなっている学部・学科が多数存在するようになってきている。こうした状況において、多くの大学で、入学者の学力を入学試験によって保証することが困難になってきており、入学してきた学力不足の学生をどのように教育し、卒業までに社会の要請に十分応えることができるような学力をどうやって身につけさせるのか、ということが大学教育に関わる重大な課題となっている<sup>1</sup>。いわゆる「学士力の達成」が、各大学に求められるようになってきているのである。

ところで、20世紀の大学教育においては、教員は自身の研究の一端を「分かりやすく」学生に教えるということを心がけて授業を行うだけでよかった。なかには、自身の研究をそのまま学生に伝えるだけの教員(学生に分かりやすく教えようという配慮をしない教員)も少なからず存在し、そうした教員は学生から「あの先生の講義は難しい」と思われていた。しかしながら、昭和の頃の学生は、難しい講義を行う教員がいても、何とか理解し(単位を取得し)ようと発奮し懸命に勉強していたのである。ところが、上述したように、21世紀になり、大学での学習に必要な基礎的学力さえも十分ではないような学生が多数入学してくるようになると、従来のような(旧帝国大学時代の名残の)授業方法をとっていたのでは、多くの学生が落ちこぼれてしまうという有様になった。大学教育をめぐるそのような情勢の中、21世紀に入ると次第に、大学での教育方法を見直し、大学は学生の学力に見合った教育を提供しなければならないと考えられるようになってきた<sup>2</sup>。その一例として、平成20年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」において、「学習

意欲や目的意識の希薄な学生に対し、どのような刺激を与え、主体的に学ぼうとする姿勢や態度を持たせるかは、極めて重要な課題」であり、「既存の知識の一方的な伝達だけでなく、討論を含む双方向型の授業を行うことや、学生が自ら研究に準ずる能動的な活動に参加する機会を設けることが不可欠である」と謳われて以来、学生と密接にコミュニケーションをとりながら展開する「双方向型」授業（ないしは「問題解決型」授業）の有効性が認識されるようになってきたことを指摘することができる<sup>3</sup>。

話は変わって、日本大学においては、「FD」が「教育の質を高めるために、教員の能力・資質を向上させることを目的とする活動」というように理解されている（日本大学全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループ、2014、6頁）。「教育の質を高める」ということは、大学全入時代にあっては、必ずしも各教員が取り組んでいる高度な研究成果を学生に伝授することではなく、むしろ学力不足の学生の学力を高めるような教育を行うということであろう。そうすると、授業を行うに際しては、何よりもまず授業に対する学生の関心を惹起し、学生に自主的に勉強する意欲と習慣を身につけさせることが要求されることになる。そのための工夫をすることが、FDの大きな柱である「授業改善」の一つのあり方である。上述の「双方向型授業」、「学生参画型授業」、「問題解決型授業」といったような授業形態も、そうした工夫の事例である。

各大学でこうした学生参画型授業のあり方を模索していく中で、次第に学生も授業に主体的に参画するようになり、さらに（関西の大学を中心として）学生の側から積極的にFD活動に関わっていきこうとする動きが見られるようになってきた。このような動向は、現在では「教員・職員・学生による三位一体のFD活動」へと発展し、FDに積極的に取り組んでいる大学で推進されている。文理学部においては、平成23年10月20日に、「学生FDの父」と称される木野茂氏（立命館大学教授）を招聘し、「学生とともに作る授業・学生とともに進めるFD」と題するFD講演会が開催された。この講演会には、教職員のみならず学生にも出席を促し、この講演会に出席した学生を中心として、文理学部における学生FD活動が始められることになった。

平成23年度における学生FD活動の主たるものは、木野氏の講演を聴いた学生を中心として、学生によるFD活動の理解並びに文理学部における学生FD活動の方向性の決定、文理学部における学生FD活動のための組織作り、追手門学院大学において開催された学生FDサミットへの参加（平成24年2月）、他大学との交流であった<sup>4</sup>。

平成24年度には、文理学部において、学生によるFD活動の母体である「学生FDWG」が正式に組織され、学生によるFD活動が本格的に始まった。学生FDWGの組織化については、平成23年度後半より、FD委員会で検討が重ねられた。その結果、学生によるFD活動は、「教員・職員・学生による三位一体のFD活動」として位置づけられるものであるということが改めて確認され、学生によるFD活動の団体を文理学部FD委員会の下部組織として設置し、FD委員会による指導・監督のもとに学生にFD活動に加わってもらう、という方針が決まった。平成24年度になり、文理学部において、学生によるFD活動の組織である「学生FDWG」が正式に発足し、また、学生FDWGを支援・監督する組織として、FD委員会に専門委員会が設置された。そして、専門委員会に関する「申し合わせ」と、学生FDWGの「規約」、学生FDWGの活動に対する「補助金に関する申し合わせ」が取り決められ、WGの活動に対して経済的な支援を行うことができるようになった。こうして、学生FDWGが結成され、平成24年度は9名のスタッフがWGに所属し活動した。平成24年度の主な活動としては、学部内では、(a) プロジェクト教育科目（総合教育科目に位置づけられる科目で、文理学部学生が企画・立案できるもの）への申請、(b) Newsletterの発行、を挙げることができる。他方、学外では、平成24年8月と平成25年3月に開催された「学生FDサミット」に参加したことが主たる活動である<sup>5</sup>。

平成25年度は、学生FDWGの活動も軌道にのり、9名のスタッフが学生FDWGに所属し活動した。平成25年度の主な活動としては、学部内では、(a) プロジェクト教育科目への申請、(b) Newsletterの発

行、(C) 定例会の開催、を挙げることができる。全学的活動としては、日本大学FD推進センター主催「日本大学学生FD CHAmiT 2013」(平成26年2月26日)の企画・開催準備・運営に携わったことが、特筆すべきことであった。他方、学外では、大学評価・学位授与機構主催「平成25年度大学評価フォーラム」への参加(7月)、年2回(8月と3月)開催された「学生FDサミット」への参加を挙げることができる<sup>6</sup>。

## 1-2 文理学部学生FDWGの活動の方向性に対する提言

続いて、文理学部学生FDWGの今後の活動(活動方針)について、教員の側からの希望を記す。そのために、まず「FD」が従来どのように理解・解釈されてきたかということに言及しておきたい。

20世紀の終わり頃(平成11年)に刊行された著作においては、例えば、「FD」がB. C. Mathisに倣って(Cf. Mathis, 1982)「個々の大学教員が所属大学における種々の義務(教育, 研究, 管理, 社会奉仕等)を達成するために必要な専門的能力を維持し, 改善するためのあらゆる方策や活動」と定義され, FDの具体的な活動として, 次のようなものが挙げられている(財団法人大学セミナー・ハウス, 1999, 16-17頁参照)。

- ①大学の理念・目標を紹介するワークショップ
- ②ベテラン教員による新任教員への指導
- ③教員の教育技法(学習理論, 授業法, 講義法, 討論法, 学業評価法, 教育機器利用法, メディア・リテラシー習熟度)を改善するための支援プログラム
- ④カリキュラム改善プロジェクトへの助成
- ⑤教育制度の理解(学校教育法, 大学設置基準, 学則, 学習規則, 単位制度, 学習指導制度)
- ⑥アセスメント(学生による授業評価, 同僚教員による教授法評価, 教員の諸活動の定期的評価)
- ⑦教育優秀教員の表彰
- ⑧教員の研究支援
- ⑨大学の管理運営と教授会権限の関係についての理解
- ⑩研究と教育の調和を図る学内組織の構築の研究
- ⑪大学教員の倫理規程と社会的責任の周知
- ⑫自己点検・評価活動とその利用

以上のように、平成11年に刊行された著作では、FDという概念がその発祥の地であるアメリカ流の理解に基づいて(広義に)定義されている。また、有本は、平成17年に刊行された著作において、FD発祥の地であるアメリカ合衆国におけるFD活動の歴史と今日の(平成17年当時の)動向、及び日本におけるFDのあり方について考察している。そのなかで、有本は、アメリカにおける「FD」の概括的な定義として、「大学教員の資質の改善を目指す取り組み」というものを示している(有本, 2005, 124頁)。そして、続けて、「傾向的には、初期の定義が教育や授業の側面に焦点を合わせているのに対して、次第にアカデミック・キャリア、専門職、ライフサイクル全体に幅を広げると同時に、活力、再生、生産性などを総合的に問題にするようになって来ている」としている。

また、有本は、日本の実情に即したFDの定義として、「知識=専門分野を素材に成り立つ学問の府としての大学制度の理念・目的・役割を実現するために必要な『教授団の資質改善』または『教授団の資質開発』」というものを示している(有本, 2005, 80頁)。そして、FDには、広義の解釈と狭義の解釈が可能であると言う。広義のFDとは、「広く研究、教育、社会的サービス、管理運営の各側面の機能の開発であり、それらを包括する組織体と教授職の両方の自己点検・評価を含む」活動を指し、他方、狭義のFDとは、「主に諸機能の中の教育に焦点を合わせ」たものであり、「教育の規範構造、内容(専門教育と教養教育)、カリキュラム、技術などに関する教授団の資質の改善を意味する」(有本, 2005, 81-82頁)。

このように有本は、(平成17年頃までに)日本においてはFDが狭義に解釈されて教育という側面に特化されている現状を認識していたが、平成18年になると、文部科学省レベルにおいても、「FD」が「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる」<sup>7</sup>というように理解されるようになり、日本におけるFDの焦

点が「教育」という側面に絞られてきていることが分かる。

以上の文献上の記述から推察できることは、日本では少なくとも8年ほど前（平成18年）までに、FDという概念のコアが「教員の資質、そのうちでも特に教育能力の改善・向上」と理解されるようになり、それを実現するために、授業改善から始まって、それ以降（平成18年以降）組織化・制度化というような問題へと徐々に拡大されていったということであろう。それでは、教員の教育能力を改善し向上させる「最終的な目標」は何であろうか。それは、学力の高い学生が入学してくる「研究大学」にあっては、国際的な競争に勝ち残ることができるような水準にまで学生の学力・研究力を向上させることであり、他方、その他の大学にあっては、卒業時に一定レベルの学力（学士力）を身につけていられるように学生の学力を向上させることである。

そうすると、こうした元々の（平成18年以降の「教育」に限定された）「FD」の理解に基づいたときに、学生によるFD活動は、どのように方向づけられるべきであろうか。上述したように、大学において一定のレベルまで学生の学力を向上させることがFDの最終目標であるとすれば、そのためには、学生自身が努力することはもちろんであるが、学生の側から教員に対してどのような授業を提供してもらいたいかを提言していくことを、活動の中心とするべきではないだろうか。

近年学生FD活動をイベントサークル化するといったようなことが行われているようであるが、FDに関わる学生たちにとっては学生FD活動に見出す「楽しみ」も必要であろう。よく言われるように「レジャーランド化」している現在の大学においては、学生生活において、時には息抜き・レクリエーションが必要であることも、我々教員は十分に承知している（むしろ、そのような要素もないとWGのスタッフが集まらないと思われる）。そのためには、学生FDWGの活動として、合宿やコンパなども必要だと考える。しかしながら、あくまでもFDとは「教員の資質、そのうちでも特に教育能力の改善・向上」である（そして、その最終目標は学生自身の学力と意欲の向上である）ことを忘れてはならないと考える。最後に、文理学部の教員が学生FDWGの今後の活動に期待・希望することをまとめておくと、学生FDWGがFDに携わるに際して、「FD」とは「教員の資質、そのうちでも特に教育能力の改善・向上」に貢献するための活動であるということを常に頭の片隅に置いて、それを実現するために学生としてどのような活動を行えばよいかということを考えていてもらいたい、ということになる<sup>8</sup>。

## 2 学生の視点から記す文理学部学生FDWG 平成26年度に至るまでの活動と、今後の展望

今宮 加奈未  
安田 結城

第2節では、文理学部学生FDWGの活動の軌跡と今後の展望について、団体の創設に関わった学生の視点から記す。まずは2-1において、文理学部学生FDWGの結成から平成25年度までの活動を振り返る。その際、WGが学生によるFD参画を単に教員の「教育能力の改善・向上」を目指すものと捉えず、授業の受益者である「学生自身の学力と意欲の向上」を呼びかける活動と捉えている立場を明らかにした上で、活動履歴を表として提示したい。次に2-2において平成26年度の活動を、平成25年度の活動との差異を明確にしながら記す。最後に2-3において、これら活動の軌跡から見る今後の展望について述べたい。

## 2-1 文理学部学生FDWGの結成から平成25年度までの活動

### 2-1-1 学生FDと中央教育審議会の提言する高等教育質保証

「学生とともに進めるFD」の高等教育質保証に対する効果については、いまだに疑問視されている側面がある。平成25年度7月、独立行政法人大学評価・学位授与機構によって開催された「平成25年度大学評価フォーラム」, 「学生参画型FDの概要と展望」についてのグループセッション記録では、参加者から学生へ投げられた「なぜ学生参画型FDが高等教育の質保証に有効なのでしょう」という質問が残されている(独立行政法人大学評価・学位授与機構編, 2014, 175頁)。文理学部内にあっても、平成23年10月の「FD講演会(学生とともに作る授業, 学生とともに進めるFD)」では、教員から即座に「FDの民主化」を招くのではないかと懸念の声があげられた(日本大学文理学部FD委員会, 2012, 25頁)。

木野によれば「学生FD」とは「学生自らの意思と主体性のもとに進められること」を基本とする活動である。また、その意味においては「大学のFD企画への動員や大学のFD活動の下請けであってはならず」「大学や教職員から方針が与えられるのではなく、あくまで学生の視点からの活動であることを保証しなければならない」(木野, 2012, 9頁)。このことから、従来FDについての専門性を持たず、FDの受益者である学生が、FDの主体者としての位置づけを得ることに疑問の声があがるのは当然のことといえるかもしれない。

文理学部学生FDWGは、学生主体のFD参画団体という立場から単に「教員の資質、そのうちでも特に教育能力の改善・向上」を主張する団体ではないことを明記したい。学生は教育者ではなく、あくまでも授業の受益者である。文理学部学生FDWGは、「大学授業の改善」を「教員の教育能力の改善・向上」のみにとどまらず、授業の受益者である「学生自身の学力と意欲の向上」にも同様に求め、これに学生の立場から呼びかけていくことを目的とした団体である。

### 2-1-2 活動履歴

平成23年後期から平成25年度にかけての学生FDWGの活動内容を報告する。前述のように、文理学部学生FDWGの結成は平成23年10月20日(木)文理学部「FD講演会」を契機としている。学生による組織結成の初期段階にあってその成果は限られているが、他方では活動の動機・方針を固めた数年であった。

平成25年度末までのWG活動履歴を表1に示す。

### 2-1-3 学生FDサミットへの参加

「学生FDサミット」とは、平成21年に立命館大学の学生FDスタッフによって構想された、「学生FD」推進を目指す、あるいは、既に取り組んでいる大学から参加者を募って開催される全国的学生FDイベントである。平成21年8月に第1回目の「学生FDサミット2009夏～大学を変える, 学生が変わる～」が開催されて以来、年2回実施の中で主催校を変えつつ開催し、現在では関西・関東を問わず約50大学(約500名)参加規模を誇る全国的学生FDイベントとなっている。その主旨は各大学が取り組みや成果を紹介することによる情報共有、大学を交えたグループによる議論を行うことにある。

表では、WGスタッフが参加した学生FDサミットに※1を付している。平成24年2月に追手門学院大学において開催されたものから数え、平成25年度末までで合計5回の参加経歴を持つ。初期のWG活動においては特に、学生FDサミットへの参加は大きな意味を担った。具体的には、学生FDサミットへの参加を報告書としてFD委員会に提出したことが最初の成果として認められたことで、WGの活動が学部に認知されるに至った。

表1：文理学部学生FDWG活動履歴（平成23年度～平成25年度）

年	月	日	活 動
23	10	20	木 文理学部FD講演会「学生とともに作る授業，学生とともに進めるFD」（講演者：木野茂 立命館大学教授）参加。学生によるFD参画グループを決起する。
	11	9	水 東洋大学学生FDイベント第三回「交流会（しゃべり場）」見学。
	11	16	水 文理学部FD委員会に「メンバー表」「活動計画書」「内規の草案」を提出する。
	12	8	木 文理学部FD委員会審議，活動支援の方向性が定められる。
	12	9	金 「学生FDチーム（仮称）活動実績」を準備，学生課長に提出。
24	1	15	日 「平成24年度『FD活動の補助金に関する取扱』による補助金申請書」を文理学部FD委員会に提出。
	2	25	土 「学生FDサミット2012 冬」（主催：追手門学院大学）に参加。※1
	3	10	土 「学生FD NEXT1～集まろう！繋がる点と広がる輪」（主催：関東圏FD学生連絡会）参加。プログラム「取り組み紹介」にて，PPTを用いた活動報告を行う。
	3	16	金 日本大学文理学部FD委員会編「2011（平成23）年度FD委員会活動報告書」に学生FDの取り組みを寄稿。
	4	1	日 「日本大学FD NEWSLETTER 創刊号」（発行：日本大学FD推進センター）に「文理学部学生FDチーム発足」の記事が掲載される。
	6	10	日 「学生FDチーム」から，「文理学部学生FDワーキンググループ」へと名称変更。
	6	21	木 学部に活動承認され，正式に「文理学部学生FDワーキンググループ」結成となる。
	7	13	金 文理学部FD講演会「教員と学生のための実践的なICTの利活用」（講演者：天野憲樹 岡山大学准教授）参加。
	8	25	土 「学生FDサミット2012 夏」（主催：立命館大学）に参加。※1
	9	1	土 「日本大学FD NEWSLETTER 第2号」（発行：日本大学FD推進センター）にWGの取り組み紹介記事が掲載される。
	9	17	月 「2012年度 関東圏FDフォーラム」（主催：関東圏FD学生連絡会）に参加。
	10	9	火 文理学部教授の研究室を訪問。「平成25年度プロジェクト教育科目」担当内諾を取得。
	10	18	木 「平成25年度プロジェクト教育科目申請書」提出※2
	10	30	火 『日本大学FDガイドブック2013』のための対話取材（主催：日本大学FD推進センター）にWGスタッフが参加。
11	28	水 「平成25年度プロジェクト教育科目」開講決定※2	
25	2	13	水 「文理学部学生FDWG Newsletter Vol.1」発行，文理学部全新生に配布。
	2	14	木 「FD活動補助金成果発表会」（主催：文理学部FD委員会）で活動成果を報告。
	3	2	土 日本大学文理学部FD委員会編「2012（平成24）年度FD委員会活動報告書」にWGの取り組みを寄稿。
	3	5	火 「学生FDサミット2013 春」（主催：岡山大学）に参加。※1
	3	9	土 「2012年度第2回関東圏FD学生フォーラム」（主催：関東圏FD学生連絡会）参加。
	3	25	月 「3/25 学生FD合同連絡会議」（主催：関東圏FD学生連絡会）参加。
	4	9	火 平成25年度プロジェクト教育科目「これから日本の未来の話をしよう」開講。※2

	5	20	月	日本大学新聞にWGの取り組み紹介記事が掲載される。(見出し:「学生企画の授業開講 教わる側主体, 学びの質向上」)
	6	11	火	千葉大学授業「公共哲学I」(小林正弥教授) 見学。
	7	18	土	文理学部FD講演会「対話型講義でつくる未来の教室」(講演者:小林正弥教授) 参加。
	7	22	月	平成25年度大学評価フォーラム「学生からのまなざし—高等教育質保証と学生の役割」(主催:独立行政法人大学評価・学位授与機構)にWG代表登壇。
	8	24	土	「学生FDサミット2013 夏」(主催:立命館大学)に参加。 ※1
	9	1	日	「日本大学FD NEWSLETTER 第3号」(発行:日本大学FD推進センター)にWGの取り組み紹介記事が掲載される。
	9	3	火	「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」(主催:日本大学FD推進センター)に学生コアメンバーとしてWGスタッフが企画・運営に参加。
	10	18	金	「平成26年度プロジェクト教育科目申請書」提出。 ※2
26	1	20	月	日本大学新聞にWGの活動を含めた学生FD活動の「特集」が組まれる。(見出し:「授業をもっと楽しく～学生FDの可能性～」)
	2	26	水	「日本大学 学生FD CHAmmit 2013」開催。(会場:日本大学法学部10号館)
	3	8	土	「学生FDサミット2014 春」(主催:関東圏FD学生連合会) 参加。 ※1
	3	13	木	「文理学部学生FDWG Newsletter Vol.2」発行, 文理学部全新生に配布。

#### 2-1-4 プロジェクト教育科目の発案

「プロジェクト教育科目」とは、文理学部における総合教育科目に位置づけられ、文理学部教員だけでなく学生が企画・立案することのできる科目のことを示す。学生が申請するにあたっては、受講予定者の名簿を20名以上集めた上で、教員に発案の意図を伝え対談の中でシラバスを作成するといった手順をとる。WGでは※2にあるように発案・申請をし、平成25年度までで前学期1科目の授業を開講した。第1回目の発案科目では、ハーバード大学マイケル・サンデル教授による白熱教室を模して科目名を「これから日本の未来の話をしよう」と題したところ、少数ではあるが受講に意欲的な学生が10名程度集まりゼミ形式の授業が展開されることとなった。

#### 2-2 平成26年度の学生FD活動

次に、平成26年度の学生FDWGの活動内容を報告する。平成26年度は、学生FDWGのスタッフの大半が入れ替わり、組織体制としての基盤整備がなされ、また、WGの活動領域が大幅に拡大したことにより、前年度までの活動内容と大きく異なっている。

##### 2-2-1 新入生勧誘(4月)

平成26年度より、新入生勧誘活動を取り入れた。前年度までは、Newsletterによる広報やプロジェクト教育科目の授業内でWGの簡単な説明をするのみであった。すなわち、勧誘という面においては、新入生からのコンタクトを待つといった受動的な勧誘方法をとっていた。しかし、上級生の卒業によりスタッフが3人に落ち込み、中長期的視点から、積極的な勧誘方法を取るべきだと判断し、本年度からはサークル用にあ



てがわれている新入生勧誘ブースへの出展と、学内掲示板の活用を試みた。

新入生勧誘ブースとは、文理学部に所属しているサークル・部活動等の諸団体が、予め決められた期間内において新入生に対して説明をする場のことである。学生FDWG創設当初より、学生FD活動に興味・関心のある者に対して公に説明をする機会を設ける事が必要と考えられていたが、学生FDWGがサークルや部活動ではないという立場の特殊性から、前年度までは新入生勧誘ブースでの勧誘をしなかった。その反省から、本年度より新入生勧誘ブースの利用を試みた。より具体的には、勧誘ブースにてNewsletterを配付しつつ、学生FDとは何か、また、普段どのような活動を行っているのかを説明した。ただし、新年度初めにスタッフは3人しかおらず、授業その他の用事により、ブースの利用時間すべてにおいて常に説明できる体制が整っていなかったということが反省すべき点である。

また、サークル・部活動等の諸団体向けに設置されている学内掲示板において、プロジェクト教育科目「2020年オリンピックの姿」の広報ポスターや、学生FDWGのポスターを掲示した。

## 2-2-2 プロジェクト教育科目開講（4月）

前年度に引き続き、今年度も学生FDWGはプロジェクト教育科目に申請し前学期に授業を開講した。今年度は、授業名及びテーマを「2020年オリンピックの姿」と定め、体育学科の西川大輔准教授、村上幸史助教、地理学科の落合康浩教授、社会学科の後藤範章教授、木下征彦講師、社会福祉学科の諏訪徹教授を教員として迎え、オムニバス形式での授業を実施した。前年度行っていなかったポスター掲示、新歓ブースへの出展などの広報を行ったことや、テーマの目新しさ、また、必修科目の授業が比較的少ない時間帯で開講したことなどから、初回授業では受講希望者が殺到し、教室定員が240名のところ、計632名が受講を希望する事態となった。ただ、授業開始時間前から廊下に溢れかえるほどの学生がいたことから受講希望届を出さずに帰った者がいたであろうと推測できるため、実際の希望者数は700名を超えていたと思われる。無論、教室のキャパシティがあるのでその場で抽選となり、受講者を教室の定員である240名まで絞ることとなった。

学生FDWGが実際に関わった事柄としては、教員紹介と授業アンケート図1の二つがある。教員紹介とは、授業冒頭で教員が行う自己紹介であり、いわゆる一般教養科目にありがちな「先生が誰だか分からない」といった状態を解消するために行った。その効果としては、この授業において独自に行ったアンケートで、「(先生の)実体験を踏まえた説明がわかりやすかったです」等、教員による自己紹介が授業内容への関心や理解に繋がったという回答があったことを指摘できる。そうしたことから、授業の初めに行った教員による自己紹介は、概ね成功だったと言える。また、この授業では、授業内にアンケートを独自に行った。このアンケートは無記名で行い、主に授業の進め方と内容に関する質問をし、述べ9回実施し、その都度学生FDWGにて集計を行った後に、次の授業までに該当教員に報告した。

アンケートを実施したことの主要な成果として、「授業の進度も適切であり、前回のコメントを活かして、静かにするように呼びかけてもらえたことが嬉しかった」など、アンケート結果が次の授業に反映されることへの反響が多々あったことや、あるいは、教員にとっては、「学生の理解度を授業のたびに確認することができてよかった」というものがあった。より具体的には、授業中私語が目立つという意見があれば次回授業の冒頭で注意を促す、あるいは、動画があると分かりやすいという意見があれば次回授業で動画を含めた視聴覚機器を積極的に用いる等、学生と教員が間接的コミュニケーションを図ることができた。学生にとって、自分の意見が次回授業に即座に反映されるという経験は物珍しかったのではないかと推察される。

また、初回授業では「この授業の受講理由は？」という設問に対して、「テーマがオリンピックだったから」、「シラバスを見て」と回答した者が合わせて186名おり、全体の77.5%を占めた。一方で「担当の先生に魅力を感じた」という回答が7%しかなかったが、いざ授業が始まり教員紹介をすると、その日のアンケートの自由記入欄には教員についての質問が殺到することもあった。こういったことから、学生が大学の

月曜4限 2020年オリンピックの姿 リアクションペーパー

月曜4限 2020年オリンピックの姿 リアクションペーパー 第\_\_回 (月 日)

**設問1. 以下の質問に丸をして答えてください**

1 私は講義内容聞き取れた……………はい・いいえ  
1.1 いいえの人(複数回答可)  
早口だった・周りの席がうるさかった・その他( )

2 私は講義内容がわかった……………はい・いいえ  
2.1 いいえの人(複数回答可)  
内容が高度すぎる・日頃縁がないテーマなのでチンプンカンプンだった・  
途中からわけがわからなくなった(具体的に: )

3 私は講義内容を面白いと思った……………はい・いいえ  
3.1 はいの人(複数回答可)  
今回の学問分野に興味がある・内容が身近だった・先生の話し方がよかった・  
その他( )

4 この回の授業を受けて良かった……………はい・いいえ

5 この授業の受講理由は?(複数回答可)  
シラバスを見て・月曜日の4限が空いていた・テーマが「オリンピック」だったから・  
担当の先生に魅力を感じた・なんとなく来てみた・その他( )

**設問2. 以下の記述をお願いします**  
先生の、こんなところが良かった!～フリースペース～

(例: たとえ話が身近で学生にわかりやすい話し方がよかった!)

もっとこのことが聞いてみたい! もっとこんなふうにしてほしい!

(例: オリンピックの実際の話を聞いてみたいです。)

ご協力ありがとうございます

図1. 学生FDWG作成授業内アンケート

授業を選択する際の基準は、教員がどのような人かということではなく、どのようなテーマの授業か、ということにあるように思われる。従って、今後学生発案型授業を企画する際も、学生にとって関心の高いテーマを選ぶことが必要であろう。学生発案型授業の特質は、まさに学生にとって関心の高いテーマを、学生自らが設定できるという点にある。

### 2-2-3 シャベリ場の開催 (4, 6月)

平成26年度より、「シャベリ場」を行っている。シャベリ場とは、教員、職員、学生がテーブルを囲み、ワールドカフェ形式やKJ法などを活用しつつ授業に関して意見交換をする場であり、ほとんどの場合、模

造紙、色ペン、付箋紙が用いられ、用意された飲食物を随時食しながら行われる。これまで2回文理学部にて行われたしゃべり場は、いずれもこの形式を踏襲し、他大学で実施されているものや学生FDサミットで行われているものと、規模は異なるもののほぼ同等の環境で開催された。

初回は「新歓しゃべり場」と題され、平成26年4月28日（月）に開催された。新歓とタイトルにある通り、主な参加者として1年生を想定した。まだ大学の授業に数えるほどしか出席していない1年生にとっては授業に関する意見交換が困難に思われたので、話し合うテーマを「大学って、楽しい？」とし、まずは大学の授業に対して抱いていた理想像を炙り出す形をとった。1年生は2名が参加し、また本学教員2名と職員1名も参加した。2回目は、「第2回しゃべり場」と題し、平成26年6月27日（金）に開催された。テーマを「みんなが望む大学の授業とは？」とし、本学教員1名と職員1名も参加した。本年度より始めたことなので、まだ試行錯誤を繰り返しており、曜日や時間等を調整しつつ今後も行っていく予定である。また、しゃべり場で示された学生の生の意見を教職員に対して伝える方法も模索していく。

#### 2-2-4 学生FDサミットへの参加（8月）

本年度の学生FDサミットは京都産業大学にて、平成26年8月23日（土）・24日（日）に行われ、文理学部学生FDWGからは8名のスタッフが参加した。これまでのサミットと異なったこととしては、プログラムの一つであるしゃべり場のファシリテータを参加した文理学部学生FDWGスタッフ全員が担当したことや、分科会に全員が登壇したことを挙げることができる。過去に学生FDサミットに出席した経験のある者は2名しかおらず、未経験者はファシリテータを担当することに不安を感じていたようだが、上述した文理学部内でのしゃべり場を2度経験し、また予め主催校から「ファシリテーションガイドライン」という、ファシリテータの役割を詳細に記載した資料が配付されていたため、当日はそれに沿ってスムーズにファシリテータを行うことができたようである。また、分科会では「学生FDはじめました」というテーマで文理学部学生FDWGの創設から現在に至るまでの流れを解説しつつ、適宜スタッフに対してWGに加入した時の心境を聞く方式をとった。これは、主催校から創設者がなぜ学生FDを始めたのか、そして、これまでのどのような経歴を辿ってきたのかを解説してほしいとの要望があったためである。結果として、用意されていた会場の定員105席がほぼ満席となり、同テーマに対する関心の高さを窺うことができた。

また、過去2回行われているポスターセッションと呼ばれる企画にも参加した。これはそれぞれの大学の取り組みをポスターにまとめて参加者が見て回るといった企画であるが、参加者アンケートの結果、文理学部学生FDWGのポスターがデザイン部門で1位となり表彰された。

#### 2-3 学生FDワーキンググループの今後

2-3では、学生FDという概念の定義を改めて明確にし、その定義が現在では拡張して解釈されている全国的動向の中で文理学部学生FDWGが今後どのように活動していったらよいのかについて述べる。

##### 2-3-1 拡大する「学生FD」の概念

「学生FD」という言葉は、2007年に立命館大学にて作られた造語である。それは、立命館大学において、学生の参画を得てFDを行うことを前年に定めたことを契機としているが、FDへの学生の参画は、この立命館大学の事例が初ではない。2001年に岡山大学で、大学から選出された学生委員がFDに参画するという「学生参画型FD」が始まっていたが、それが他大学へと波及していくことはなかった。一方で、上記立命館大学の「学生FD」とは、学生FDスタッフの主体的な活動を実現するために担当教職員が三位一体の精神で支援にあたるという方式をとっており、立命館大学ではこれを学生FDの定義としている。そして、この学生FDは現在60以上の大学へと広がりつつある（木野、2013、10頁）。この差異は、「学生FD」が

学生による主体的行動なのか、それとも主体的行動ではないのか、という点に違いがあると思われる。すなわち、学生FDに関わる学生が自主的に活動しようとしているのか、それとも大学側から選出されたのかという違いである。そして、この違いこそが現在の学生FD活動の多様性を生み出していると考えられる。

従来の学生FD活動といえば、学生が教職員とテーブルを囲んで授業について話し合う「しゃべり場」や、学生からアンケートを集計して決める「ベストティーチャー賞」など、授業に関わるものが主流であった。FDが教員の資質向上を目指すものであるため、FDの成果の受け手である学生の側からのアプローチとしては、授業という場に行き着くのは当然のことのように思われる。多くの学生にとって教員と直接関わるのは授業であり、教員の資質が試される場はやはり授業なのである。従って、初期の学生FDにおいては、その主な活動の舞台は、授業と関わりのある領域であった。また、佐藤、2008によると、FDそのものが、ミクロ・レベル（授業論）、ミドル・レベル（カリキュラム論）、マクロ・レベル（組織論）、以上三つのレベルに分類される（佐藤、2008、68-72頁）。こうしてみても、やはり学生が関与出来るのはせいぜいミドル・レベルまでであり、学生FDの主なフィールドはミクロ・レベルである授業に関わる活動となる。

ところが、現在の他大学の学生FD活動を見ると、「国際交流企画（小樽商科大学・商大充）」や「クリーンアップ大作戦（中京大学学生FDスタッフグループ・SEARCH）」など、授業と直接関わりがない活動を行っているところもあり、また、自治会やイベントサークルなどの学生FD組織ではない団体が、活動の一環として学生FDを行うといったケースも見受けられるようになってきた。これらは、立命館大学により生み出された「学生FD」という概念が、一部では学生による主体的活動全般と理解され、その先にあるFDそのものの理解へと到達していないことが一因であるように思われる。言い換えれば、学生FDが、大学に対する学生からのアクション全般のことだと認識され、活動内容も学生生活全般へと拡張されつつあるというのが現状ではないだろうか。これは、上述した三つのレベルに分類されるFDとは異なった方向へと学生FDが進んでいることを意味している。すなわち、大学での学生生活全般を対象とする学生FDと、あくまでも大学内での授業・学修に関する取り組みに従事する学生FDとが、それぞれ異なるものとして分化しつつあるのではなかろうか。こうした懸念は、学生FDサミットへの参加を重ねる度に強く感じられるが、その一方で、さらに、後者の大学内での学生FDも、大学の学修全般へと進む学生FDと、授業の改善を中心とした学生FDとに分化しつつあるようにも見受けられる。学生FDは今、大きな転換期を迎えていることは間違いない。

### 2-3-2 学生FDWGの今後

このように、捉えられ方が広がりつつある学生FDを見据えつつ、文理学部学生FDWGは今後一体どのような存在となっていくのかを考えていきたい。恐らく大半の学生からすると、大学に対して提言しそれが実現される、もしくは実現できる組織は非常に魅力的であり、特に文理学部のように学生による自治体を持たない学部にとっては、こうした“affectable”な主体的学生組織は学生から望まれているだろう。こうした点で、学生生活全般を対象とする「学生FD」のあり方もなくはない。しかし、日本大学ないしは文理学部においては、今後数年にわたっては、学生FD活動を授業に対する取り組みに限定すべきではないかと考える。それは、単に学生FDという名を冠する以上、その取り組みも授業やカリキュラムに絞るべきだからということによるのではなく、現在の学生FDWGの活動が一定の成果をあげていることによる。プロジェクト教育科目「2020年オリンピックの姿」では、学生の発案したテーマに632名が関心を示したという事実だけではなく、聞くところによると、授業を履修していない多くの学生までもがこの授業の存在を認知しており、またそれが学生によって企画されたことまで広く知られているようである。「学生にとって良い授業とは、分かり易くて楽しい授業であり、それは担当教員の専門的知識や雰囲気由来する。そして、授業のやり方・方法は二の次である」（財団法人大学セミナー・ハウス、1999、45頁）という考え方もあるように、

FDが主として授業の方法を改善していくのに対して、学生FDによる学生発案型授業は、学生にとって良い授業を創出する作業ともとれる。学生発案型授業では、授業方法の工夫に加え、教員の専門的知識やテーマを重視し、その結果、多くの学生の関心を得ることができた。これはまさに学生発案型授業の成果の一例であり、授業に限った取り組みだけでも十分に“affectable”であり得るのである。

学生FDというものの定義が曖昧なままに受け取られ、活動や捉えられ方が拡大するからこそ、文理学部学生FDWGは方向性を見失わぬように原点に立ち返りつつ、その活動を進めていくべきではないだろうか。自主創造の理念の下で学生自らが立ち上がり活動を始めた文理学部学生FDWGでは、現在、授業に関連する活動を行いつつも、その領域を広げつつある。しかしその拡張された領域が、FDの本質である授業改善とどれほどの関連を持っているかを常に振り返り、FDの目的と合致するのかを自己反省しつつ今後の活動を続けていきたい。

## おわりに

本稿は、文理学部において学生FDWGが組織されるに至った経緯とこれまでの活動の軌跡を、教員と学生の視点からそれぞれ報告し、合わせて、WGの今後の活動の方向性・展望について教員と学生がそれぞれ思うところを記したものである。活動報告については、実際に活動した者たちが執筆し、互いの原稿を読み合ったため、正確な記録を残すことができたと考える。また、学生の側から（今後の活動の方向性として）、文理学部学生FDWGは、これまで、学生主体のFD参画団体として、授業改善の目的を、教員の「教育能力の改善・向上」ではなく、むしろ授業の受益者である学生自身の「学力と意欲の向上」と理解し活動してきたのであり、今後もそのような理解のもとにWGの運営を行っていくことになるはずだ、という見通しが示唆されている。そして、学生FDという概念が「授業」の範囲を越えて拡大解釈されつつある昨今の風潮に対しては、文理学部学生FDWGは、あくまでも「授業」と関連する範囲で活動すべきだという提言が示されている。それに対して、教員側からは、FDとはそもそも「教員の資質、そのうちでも特に教育能力の改善・向上」に貢献するための活動だということを忘れずに活動してってもらいたい（具体的には、教員が行う授業に対してWGからいろいろと提言してもらい、等々）という希望が示されている。教員、学生ともに、学生FD活動の焦点を「授業」に絞るということでは一致しており、執筆者一同、今後しばらく文理学部学生FDWGは、そのような方針で活動を続けていくものと期待している。

## 注

1. 大学生の学力低下については、有本, 2005 に、次のような具体的記述がある。

「大学生は大丈夫であろうか。東大生が『読めない、書けない、考えない』と揶揄されたのは1980年頃であったことを想起すると、その頃には現在のゆゆしき状態を予兆する現象がすでに全国の津津浦々の大学で着実に進行していたことが分かる。最近では、700以上のすべての大学をまきこんで、学問への好奇心を欠き、学習力ややる気を欠く学生が増えているという声を聞くことが多くなった。分数・小数ができない学生が増え、授業中の私語・死語・無語をはじめ『問題な日本語』、さらには不登校、フリーター、ニートなどが問題にされている。その裏では、導入教育や転換教育やはたまたりメディア教育=補習教育によって、やる気や学習方法を意図的に引き出し、励まさないといけない状態が大なり小なり日常化しつつあるのである。」(有本, 2005, i頁)

- また、大学の 대중化と学生の変貌については、岩見、2004 を参照のこと。
2. 清水、2012、鈴木、2012 などを参照のこと。
  3. この答申が出された後、学生参画型授業の実践例を紹介した著作として、例えば、小田と杉原、2010、小田と杉原、2012 などが刊行されている。
  4. 平成 23 年度の活動の詳細は、日本大学文理学部 F D 委員会、2012、147-149 頁を参照のこと。
  5. 平成 24 年度の活動の詳細は、日本大学文理学部 F D 委員会、2013、154-156 頁を参照のこと。
  6. 平成 25 年度の活動の詳細は、日本大学文理学部 F D 委員会、2014、95-119 頁を参照のこと。
  7. 文部科学省中央教育審議会大学分科会制度部会〔第 21 回（第 3 期第 6 回）：平成 18 年 10 月 19 日・三田共用会議所 4 階第 4 特別会議室〕における配付資料 5-1「大学教員のファカルティディベロップメントについて」より引用。
  8. もちろん、今後時間の経過とともに、日本における F D の定義や解釈が変わり、「大学教育の改善・向上」が F D の定義（のコア）から外されるということがあれば、ここに述べたような学生 F D W G の活動方針も変わることになる。

## 引用文献

- 有本章. 2005. 大学教授職と F D : アメリカと日本. 第 1 版. 東信堂. 東京.
- 独立行政法人大学評価・学位授与機構編. 2014. 大学評価フォーラム 学生からのまなざし—高等教育と学生の役割. 第 1 版. 独立行政法人大学評価・学位授与機構. 東京.
- 岩見和彦. 2004. 変貌する学生. 学士課程教育の改革：講座「21 世紀の大学・高等教育を考える」第 3 卷（絹川正吉・館昭編著）. 第 1 版. 107-125 頁. 東信堂. 東京.
- 木野茂. 2012. 学生 F D サミット奮闘記：大学を変える，学生が変える 2：追手門 F D サミット編. 第 1 版. ナカニシヤ出版. 京都.
- Mathis BC. 1982. Faculty Development. Encyclopedia of Educational Research (Mitzel HE. ed.). Fifth edition. Vol. 2. pp. 646-655. Free Press. New York.
- 日本大学文理学部 F D 委員会編. 2012. 2011(平成 23)年度 F D 委員会活動報告書. 第 1 版. 日本大学文理学部. 東京.
- 日本大学文理学部 F D 委員会編. 2013. 2012(平成 24)年度 F D 委員会活動報告書. 第 1 版. 日本大学文理学部. 東京.
- 日本大学文理学部 F D 委員会編. 2014. 2013(平成 25)年度 F D 委員会活動報告書. 第 1 版. 日本大学文理学部. 東京.
- 日本大学全学 F D 委員会教育情報マネジメントワーキンググループ. 2014. 日本大学 F D ガイドブック： “自主創造”のための Teaching Guide. 第 3 版. 日本大学 F D 推進センター. 東京.
- 小田隆治・杉原真晃編著. 2010. 学生主体型授業の冒険：自ら学び，考える学生を育む. 第 1 版. ナカニシヤ出版. 京都.
- 小田隆治・杉原真晃編著. 2012. 学生主体型授業の冒険 2：予測困難な時代に挑む大学教育. 第 1 版. ナカニシヤ出版. 京都.
- 佐藤浩章. 2008. ファカルティ・ディベロッパーという仕事 (1) ミクロ・レベルでの取り組み：IDE 現代の高等教育：Vol.500. 68-72 頁. 大阪.
- 清水亮. 2012. 大学は変わったのか. 学生・職員と創る大学教育：大学を変える F D と S D の新発想（清水

亮・橋本勝編著). 第1版. 2-13頁. ナカニシヤ出版. 京都.

鈴木典比古. 2012. 教育改革は現場主義で行こう: 空理・空論の時期は過ぎた. 学生・職員と創る大学教育:

大学を変えるFDとSDの新発想 (清水亮・橋本勝編著). 第1版. 14-27頁. ナカニシヤ出版. 京都.

財団法人大学セミナーハウス編. 1999. 大学力を創る: FDハンドブック. 第1版. 東信堂. 東京.

